

第3章：上人壇廃寺跡の価値

第1節：史跡の本質的価値

①奈良時代から平安時代の東北地方における地方寺院の実態を示す高い学術的価値

上人壇廃寺跡の所在する石背郡域は、上人壇廃寺跡の東側に位置する阿武隈川流域を本拠地とする石背国造の支配地域でした。7～8世紀にかけて次第に上人壇廃寺跡や石背郡衙の位置する阿武隈川と釈迦堂川の合流点付近にその中心を移してきました。

その背景には、中央政府と陸奥国府多賀城とを結ぶ幹線道路がこの地を通過して整備されたことに一因があると考えられています。

上人壇廃寺跡は、石背郡と関わりのある寺院で、昭和36（1961）年以降、大きく分けて3次にわたる発掘調査により、南門、金堂、講堂などと推定される建築遺構が明らかにされました。遺跡の南端は東北本線用地として削られているものの、金堂の基壇をはじめ、主要な遺構は残されています。

創建当時の伽藍配置は、溝と塀によってほぼ方形（正方形）に囲まれた東西約80m、南北約84mの寺域のなかに、南から南門、金堂、講堂が一線上に連なっていました。この特徴的な伽藍配置は、東北地方の古代寺院としては類例が少なく、奈良時代から平安時代の東北地方における地方寺院の実態を示す一つの例として、高い学術的価値を有しています。

なお、上人壇廃寺が位置する石背郡は、奈良時代の養老2（718）年に陸奥国から分置された石城国・石背国のうちの石背国に属しましたが、その後、再び陸奥国に再併合される養老5（721）年頃までの少なくとも3年間、石背国の中心地にあったものと推定されています。

②金鼓・経軸端など、寺院の荘厳を示す全国的に稀有な遺物が出土

上人壇廃寺跡からは寺院で用いた道具類が多く出土しています。灯明皿や硯、托鉢や供養に用いた鉢などの土器類のほか、寺院の屋根を葺いた瓦や塔の代わりに用いた瓦塔、金鼓・経軸端などの金属製品、鎮壇具に用いた可能性の高いガラス小玉や勾玉などのガラス・石製品などが挙げられます。

このうち上人壇廃寺跡を特徴づける遺物として、金鼓や経軸端、金が付着した緑釉陶器などがあり、当時の寺院の荘厳さを示す、全国的にも稀有なものといえます。

金鼓は、寺院内で打ち鳴らす鉦^{かね}で、耳（吊手）が3か所あります。形態的に朝鮮半島のものに類似しており、年代的に国内最古の可能性がありますが、また、鉄製品の金鼓は古代のものに限れば、全国唯一となります。

経軸端は、卷子装の經典に用いた軸止めで、撥形（はたきかたまり）のものが7個体出土しています。銅板に毛彫りや魚子（ななこ）を施したのちに金箔を貼ったことがこれまでの分析で判明しています。東日本では日光男体山頂に次ぐ出土量を誇り、かつ時期が特定される資料として全国的に稀有なものです。この軸端を用いた經典は残っていませんが、内面に金が付着した緑釉陶器が出土しており、これを硯として用いた紺紙金泥のいわゆる装飾経であった可能性が考えられます。

③金堂と瓦塔が一体化した「塔」として象徴的な六角形の瓦塔が出土

上人壇廃寺跡からは、六角形の塔を模した瓦塔が金堂跡（基壇建物跡）とその周辺の斜面から多く出土しています。このことから、金堂は瓦塔を安置した建物で、寺院の「塔」としても認識されていたと推測されます。この基壇建物の平面形が現存する海龍王寺の西金堂に類似する点、小形の木製小塔を収める点などが上人壇廃寺跡と共通することがこれまでの調査で判明しています。また、屋根や軸部が六角・八角形の多角形の瓦塔はこれまで二十数例確認されていますが、多角形の瓦塔のなかでは最も残りのよい瓦塔で、東北地方では初現期（8世紀前半）のもので、このように、瓦塔の使用方法が明らかであることや類例の少ない多角形の瓦塔である点で、全国的に貴重です。

第2節：新たな評価の視点

①現代へと続く「石背」の中心としての記憶

本史跡の所在地は、江戸時代は「上人段」と呼ばれる土地でした。その後、「上人壇」、「上人坦」という現在残っている地名へと変遷しています。「上人」とは寺院の僧侶や高僧などを指すことから、江戸時代でもこの地が寺院跡として認識されていた可能性があります。

また、「上人壇」の由来となったのが、現在、上人壇廃寺跡にある金堂跡の基壇とされています。この基壇が「上人」の「壇」として認識されてきており、これが現在まで受け継がれています。

また、現在の郡名は「岩瀬」郡ですが、古代は「石背」の漢字を用いた時期があります。この古代の「石背」の表記は、石背国造神社（須賀川市長沼に鎮座）などで用いており、現在では復古的な意味で用いることもあります。

このように、「上人壇」・「石背」はともに先人たちの過去の記憶が子々孫々と受け継がれてきたために、現在まで残っているといえます。古代に栄えた「上人壇」廃寺跡や栄町遺跡に代表される「石背」郡衙関連遺跡など、「石背」郡・国の記憶を未来に残し伝えることで、過去の歴史を振り返ることが可能であるといえます。

②須賀川市の文化財保護の原点となる史跡

上人壇廃寺跡の最初の調査である昭和36（1961）年の東北本線複線化にともなう調査は須賀川市で初めて組織的に実施されたもので、福島県内でも黎明期の行政主体の発掘調査です。この調査では、のちに須賀川市の文化財保護を担う多くの人物が参加し、市の文化財保護の原点として位置づけることが可能です。

また、福島県内で初の公立博物館である須賀川市立博物館建設の経緯となった首藤保之助コレクション（旧阿武隈考古館所蔵品）には、本遺跡から出土した瓦塔や瓦がふくまれます。また、鈴木安信コレクション（福島県立博物館所蔵）などでも、上人壇廃寺跡から出土した瓦が収集されていることが知られています。これらは上人壇廃寺跡を後世に残そうとした結果であり、上人壇廃寺跡は、先人による遺跡保存の歩みを語るものとしても重要な遺跡です。

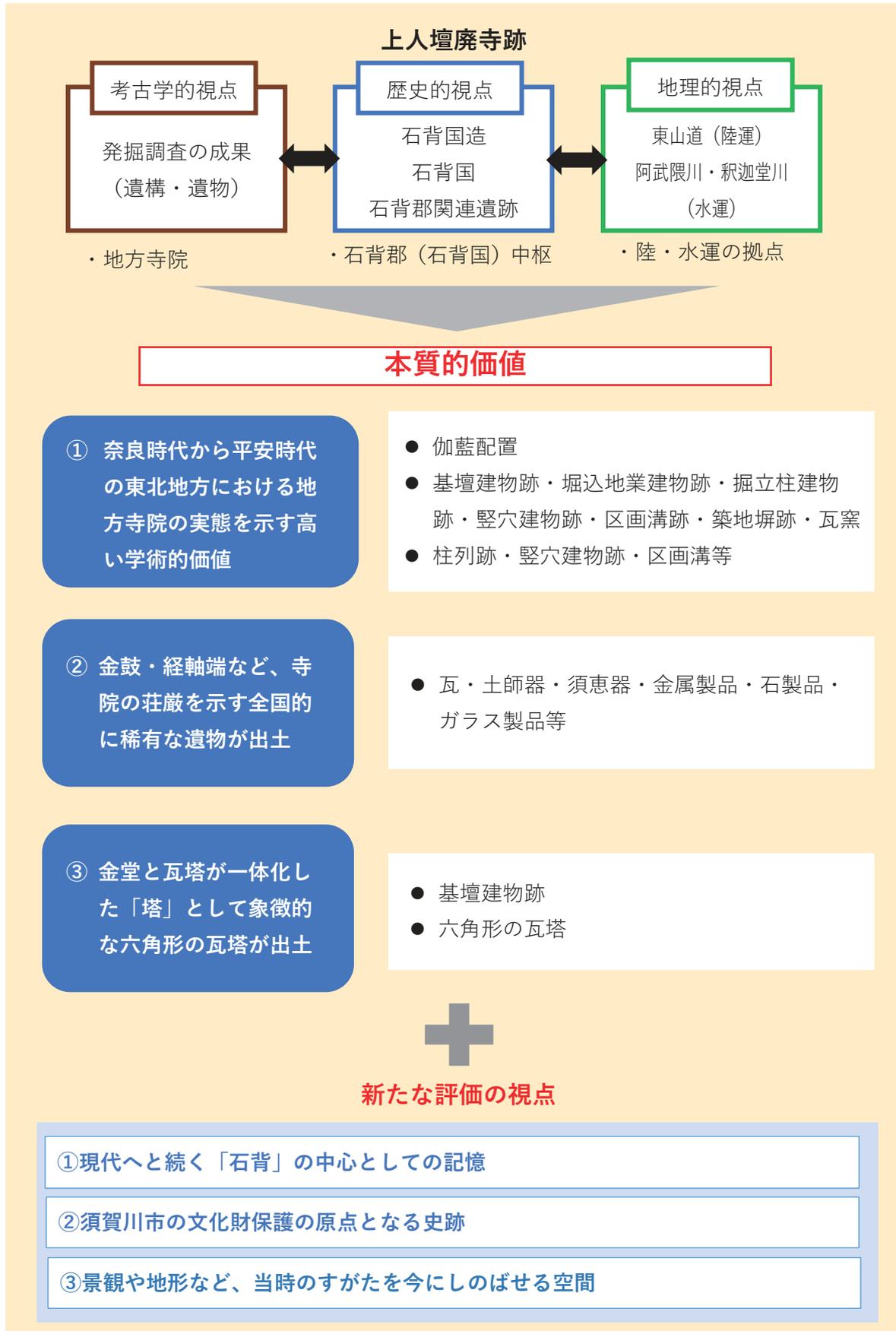
③景観や地形など、当時のすがたを今にしのばせる空間

上人壇廃寺跡は、現在の須賀川駅の西側に近接しています。

昭和36（1961）年の調査時、調査地点やその周辺は畑などの田園風景でしたが、史跡指定地の周辺はその後の開発などで市街地化が進んでいます。また、須賀川駅の東側一帯は区画整理事業によって削平されるなど、その景観が大きく変化しています。

上人壇廃寺跡は、このような立地環境にありながら、周囲への眺望が広く開けているなど、地形や景観の特性が先人たちの努力によって現在まで残されており、寺院が機能していた奈良・平安時代に思いを馳せることができる数少ない空間の一つです。

このことから、上人壇廃寺跡は、当時のすがたを今にしのばせ、歴史的想像力を喚起する空間として貴重です。



第 51 図 本質的価値および新たな評価の視点

第3節：上人壇廃寺跡の構成要素

(1) 本質的価値

第10表 本質的価値とその構成要素

本質的価値①		奈良時代から平安時代の東北地方における地方寺院の実態を示す高い学術的価値
構成要素	ア) 発掘調査により地下に埋蔵されている遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・基壇建物跡（金堂跡 SB05） ・掘込地業建物跡（講堂 SB06） ・掘立柱建物跡（南門 SB01・東門 SB001 など） ・竪穴建物跡（SI02～SI07） ・区画溝跡（SD14・29 ほか） ・築地塀跡 ・瓦窯跡（1～4号窯跡）
	イ) 発掘調査によって記録保存された遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・柱列跡（SA011） ・竪穴建物跡（SI01） ・区画溝跡等
本質的価値②		金鼓・経軸端など、寺院の荘厳を示す全国的に稀有な遺物が出土
構成要素	ア) 出土した主な遺物と地下に埋蔵されている遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・瓦 ・土器 ・須恵器 ・金属製品 ・石製品 ・ガラス製品等
本質的価値③		金堂と瓦塔が一体化した「塔」として象徴的な六角形の瓦塔が出土
構成要素	ア) 地下に埋蔵されている遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・基壇建物跡
	イ) 出土した主な遺物と地下に埋蔵されている遺物	<ul style="list-style-type: none"> ・六角形の瓦塔

(2) 新たな評価の視点

第 11 表 新たな評価の視点とその構成要素

新たな評価の視点①		現代へと続く「上人壇」・「石背」の記憶
構成要素	ア) 上人壇廃寺跡の由来となった基壇建物跡	
	イ) 石背郡の関連資料や遺跡	
新たな評価の視点②		須賀川市の文化財保護の原点となる史跡
構成要素	ア) 過去における調査資料	
	イ) 遺跡保存に関する関係資料	
新たな評価の視点③		景観や地形など、当時のすがたを今にしのばせる空間
構成要素	ア) 原地形や空間、眺望、植生	
	イ) 景観（現在の市街地との比較）	

第4章：現状と課題

第1節：保存管理の現状と課題

上人壇廃寺跡の史跡指定地全域は公有化が完了しています。また、遺構は概ね40cm～50cmの盛土を行っており、保存という観点では良好な状態です。

しかし、史跡地内は隣接する中学校から雨水が流れ込むなど、この雨水処理や、線路側斜面にある樹木の管理等の課題が挙げられます。

また、史跡指定地の周辺は中学校や個人住宅、鉄道線路、樹木などがあり、特に史跡指定地北側や西側は開発が顕著です。

これらの地域は、上人壇廃寺跡に関連する遺構・遺物が埋蔵されている可能性があるため、その周知を図る必要があります。また、埋蔵文化財包蔵地やその周辺地域を含めた発掘調査の結果に基づいた保存の措置など、これらの地域における遺跡保存のありかたなどについて検討が必要です。

さらに、維持管理は年数回の除草を委託業務で実施していますが、夏場は除草が追い付かない状況であることや、維持管理のために個人所有の土地を借地しているなど、今後の継続的な維持管理のありかたも課題です。

第2節：活用の現状と課題

上人壇廃寺跡の出土遺物の展示・公開は、市立博物館、須賀川市歴史民俗資料館のほか、市外への博物館等への資料の貸し出しも含め、多くの実績があります。また、須賀川知る古会が、須賀川市立第二小学校（以下、須賀川第二小学校という。）の総合学習「ふるさと探検隊」の一環で、上人壇廃寺跡を含む石背郡衙関連遺跡を巡る学習を実施しています。

一方、現地の活用においては説明板を設置していますが、学校の見学等で利用するにとどまっています。史跡は須賀川第二中学校に隣接していますが、中学校と連携した取組は、これまでほとんど行われておらず、市民向けの活用もほとんど実施されていません。

上人壇廃寺跡は、昭和50年代の調査時に公園として整備する機運が高まりましたが、その後の関係者協議による追加調査の必要性などの状況変化により整備の方向性が定められず、市民の遺跡への関心度は時間とともに低下しました。そのため、過去の機運を再度高め、地域住民や小中学生に対して上人壇廃寺跡の関心を高める方策を行政、住民がともに考え、実践していくことが必要となります。

さらに、先人たちの努力によって保存された景観や地形などは、当時のすがたを今にしのばせる空間とも言え、これらを未来に伝えるための活用を図っていくことが必要です。

第3節：整備の現状と課題

整備に関しては、活用同様、これまでほとんど行われておらず、史跡の説明板を設置しているのみで、整備の目的や効果、方法などをわかりやすく伝えるための周知が不足しているのが現状です。今後の整備にあたっては、上人壇廃寺跡の価値を発信するサイン整備やガイダンス施設などのありかた、東側に近接するJR東日本東北本線の鉄道、須賀川第二中学校から線路方向に走る土側溝など、今後、整備をする上での課題があり、検討を要します。さらに史跡地に表示物の設置などを行うにあたっては、現在の盛土の厚さでは十分ではなく、更なる盛土等による保存を行う必要があります。

また、史跡のアクセスについては、これまでは入り組んだ狭い道路を通らなければならないなどの課題がありましたが、須賀川駅西地区の都市再生整備事業により、アクセス道などが整備される計画です。これらについては、都市整備課との連携を図りながら進めていく必要があります。

第4節：運営・体制の整備の現状と課題

須賀川市は史跡の管理団体に指定されており、史跡地内の現状変更等に関わる事案については、須賀川市文化スポーツ部文化振興課文化財係（須賀川市教育委員会の補助執行）が対応しています。史跡の保存管理・活用も同じく担当していますが、専門職員や事務に携わる職員の配置が十分とは言えないのが現状で、今後の整備に向けて、適切な人員配置が求められます。

また、市の企画・開発部局や観光関連の部署との連携も、今後の活用や整備を図る上では、今以上に密にすることが必要です。

さらに、上人壇廃寺跡に対する住民の認知度が低いという課題に対して、上人壇廃寺跡の啓発と普及、今後の維持管理や活用・整備に向けた体制の構築も課題です。

具体的には、今後の史跡公園としての活用を意識した市民の意識向上を図るためのワークショップやイベント等の開催、ボランティアガイド等の人材育成など、地域住民や周辺自治会、関連部局・部署との連携を密にし、運営体制を構築していくことが必要です。

また、将来的には史跡公園としての質を高め、利用者ニーズに則したガイダンス施設などのサービス提供のために、民間活力の導入を意識した取組についても検討をしていきます。

第5章：大綱・基本方針

市民とともに^{はぐく}育む古代寺院「上人壇廃寺跡」

上人壇廃寺跡の保存活用において最も重要なことは、史跡を適切な状態で保存し、未来へと継承していくことです。

そのためには、地域住民及び須賀川市への来訪者が、史跡の価値を十分に理解し、その認知度を高めながら、愛着を持って活用していくことが重要です。

本市においては、須賀川市第8次総合計画で上人壇廃寺跡の公園的整備を予定していますが、魅力ある保存活用を目指し、地域住民をはじめとした関連部局との密接な連携のもと、短期、中・長期の段階的な保存活用計画を実践していくことが必要です。

また、上人壇廃寺跡のみならず、周辺の栄町遺跡やうまや遺跡、米山寺跡・史跡米山寺経塚群などといった石背郡衙関連遺跡群と一体的な保存・活用及び整備を図ることで、歴史的な意義をより深く理解し、史跡の価値と愛着がさらに高まることを目指します。

【基本方針】

- 上人壇廃寺跡の保存を第一として、未来へ継承する。
- 市民・来訪者の憩いの場としての活用を図る。
- 古代の石背郡に関わりのある遺跡を含めた情報発信や市民の活動拠点として活用する。
- 上人壇廃寺跡の整備を行い、古の遺跡の特徴を表現する。
- 眺望など古代に思いを馳せる空間として整備する。
- 地域住民、市民、関連団体、行政が協働する管理運営の構築を目指す。